

## 英語 there 構文と述語名詞の定性効果について\*

本田 隆 裕

On the Definiteness Effect in *There*-Constructions and Predicate Nominals

Takahiro HONDA

## 1. はじめに

英語のthere構文は生成文法理論で頻繁に議論される構文の一つである。生成文法におけるthere構文研究では主に、(i) 述語の数が決定される仕組み（述語の一致）、(ii) 意味上の主語（以下、連結詞（associate））に見られる定性効果（definiteness effect）、(iii) there構文に出現可能な動詞の種類、という3点が議論されている。本論文では、(1)に見られるような定性効果について取り上げることにする。

- (1) a. There is a wolf at the door.  
 b. \*There is the wolf at the door.  
 c. There were several people cycling along the creek.  
 d. \*There were John and Mary cycling along the creek.  
 e. There was an article mentioned.  
 f. \*There was Frank's article mentioned. (Milsark 1977: 4)

(1a, c, e)の連結詞は不定 (indefinite) 名詞句であるのに対して、(1b, d, f)の連結詞は定 (definite) 名詞句である。一般的に、there構文の連結詞の位置には定名詞句が現れることができず、このような現象は定性効果あるいは定性制約 (definiteness restriction) と呼ばれている。ところが、次節以降で見ると、there構文の定性効果は単に連結詞が定であるか不定であるかということだけの問題であるとも言いきれないことがしばしば指摘されており、本論文では定性効果をどのように捉えるべきかについて一考してみたい。

## 2. 定性効果の例外

前節で述べたように、連結詞の位置に定名詞句が現れたからといって必ずしも定性効果が見られる

わけではない。(2) のような例においては、連結詞の位置に定名詞句が現れているが、文脈によって(2) は容認されると言われている。<sup>1</sup>

- (2) a. # There was Margaret at the party.  
 b. # There were them/those waiting outside. (McNally 1997: 9)

久野・高見(2004)は、連結詞の名詞句が聞き手にとって未知の情報(新情報)を表す場合は、固有名詞なども連結詞位置に出現可能であると説明している。また、Lumsden(1988)は(3)のような例を、Belletti(1988)は(4)のような例を、それぞれ連結詞位置に定名詞句が現れる例として挙げている。

- (3) a. There's the University of Stoke.  
 b. There is my aunt from Worthing. (Lumsden 1988: 110)  
 (4) There is the newspaper on the table. (Belletti 1988: 16)

Lumsden(1988)は、(3b)について、“Do you know any strong swimmers?”のような質問の答えになっている場合は容認可能であると述べているが、これはMilsark(1974)が言うところのリスト読み(list reading)に該当するからであると考えられている。つまり、strong swimmerに該当する人物のリストがあった場合、(3b)のmy aunt from Worthingがそのリストの一部に該当するためである。Belletti(1988)は、リストに当てはまる要素の数は一つだけであってもよく、(4)のような場合でも、the newspaperが今日の新聞を表していれば、(一つしか要素がない)リストの一部を成しているので容認されると説明している。このように、表面上は定名詞句であっても、文脈によって定性効果が見られない場合もある。

### 3. there構文と述語名詞句に共通する定性効果

前節で見たような定性効果の例外は固有名詞などで見られることがあっても、以下のような数量詞を伴う名詞句が連結詞位置に現れた場合は容認されることはないようである。

- (5) a. \* There was every/each participant upset with the arrangements.  
 b. \* There were both/most ambassadors housed at that hotel. (McNally 1997: 9)

Milsark(1977)は、everyなどの全称数量詞(universal quantifier)に該当する数量詞を強数量詞(strong quantifier)として分類し、さらにtheなどの定の限定詞についても強数量詞と分類することで、there構文の定性効果は連結詞位置に強数量詞が現れることができないことによって引き起こされると説明している。先に見たように、定冠詞のthe自体は必ずしも強数量詞に分類されるわけで

はなく、文脈上、定性を示さないような場合は強数量詞として機能していないと考えられる。固有名詞についても同様であると考えれば、there構文の定性効果とは連結詞位置への強数量詞の出現を禁止する制約であると言える。なお、限定詞を伴わない質量名詞 (mass noun) や複数名詞は (6a) のように全称数量的な解釈も可能であるし、そうではない解釈も可能である。

- (6) a. Coffee is tasty.  
 b. There is coffee on the stove. (Milsark 1977: 7)

つまり、(6a) では全てのコーヒーについて述べている文であるのか、一部のおいしいコーヒーが存在すると述べている文であるのか曖昧になっている。一方、(6b) においてはこのような曖昧性は存在せず、全称数量的な解釈は不可能である。これは一般常識などによるものではなく、there構文という構造上の理由によることは次の例からも明らかである。

- (7) There are koala bears in Australia. (Milsark 1977: 8)

コアラはオーストラリアにのみ (野生では) 生息するものという一般常識があったとしても、(7) の koala bears は全称数量的な解釈は不可能である。したがって、there構文の定性効果については、定名詞句という概念よりも強数量詞という概念により捉えることが適切であると言える。

なお、全称数量詞についても常に強数量詞に分類されるとは限らず、例えば (8) のような例では、allやeveryが現れているが容認可能である。

- (8) a. There are all sorts of other false definites.  
 b. There is every reason to study them. (Ward and Birner 1995: 739)

Ward and Birner (1995) によれば、(8a) の all sorts of は a lot of のような意味であり、(8b) の every reason は good reasons または many reasons のような意味として解釈されている。

さらに、定性効果はthere構文以外でも、例えば (9) のような述語名詞句についても見られる。

- (9) a. We consider John *a genius*.  
 b. ? They thought/believed him *the lawyer*.  
 c. \* They believed John and Mary *every friend*.  
 d. ? I thought the guests *many friends of hers*.  
 e. ?? I believe the Mayor *John*. (Rothstein 2001: 57)

(9) においてイタリックになっている名詞句はその直前の名詞句の述語になっている。このような

名詞句についても、there構文の連結詞と同じような定性効果が見られる。あまり先行研究では指摘されていないが、2節で見たように、there構文の連結詞位置には、文脈によって定冠詞theを伴う名詞句や固有名詞が出現可能な場合とそうでない場合があるが、強数量詞は常に出現が不可能であるという点で、述語名詞句に見られる定性効果と全く同じような定性効果を示していると言える。(9e)の容認性はかなり低く記載されているが、例えば、Williams (1994) は (10a, b) がともに容認可能であると述べており、このことはtheを伴う名詞句も固有名詞も述語名詞句の位置に現れ得ることを示している。

- (10) a. I consider John the mayor.  
 b. I consider the mayor John. (Williams 1994: 42)

(10a) と異なり、(10b) はやや特殊な例のようであるが、どのような存在物とその市長 (the mayor) であるのかということは分かっているが、どのような存在物にJohnという名前が適用されるのかがはっきり分かっていないような状況では容認可能な文であると説明されている。<sup>2</sup>

このようなことから、there構文の連結詞と述語名詞句にかかる定性効果は同一の現象であると本稿では仮定する。次節では、この定性効果が生じる統語的な理由について提案を行う。

#### 4. 定性効果と格素性

英語there構文の統語派生は生成文法では頻繁に取り上げられる課題の一つであるが、統語構造と定性効果の関係について、例えば、Belletti (1988) は連結詞が動詞補部の位置に留まることにより、動詞から部分格 (partitive Case) を付与され、部分格と整合しない定表現は連結詞の位置に出現不可能となっていると説明している。この分析自体は広く受け入れられているものであるが、もしこの部分格分析が正しいとすれば、(9)に見られるような述語名詞句の定性効果についてはどのように説明されるのだろうか。述語名詞句については、その述語の(意味的な)主語である名詞句は動詞の補部位置に現れているが、述語名詞句そのものは動詞の補部には現れておらず、部分格とは無関係であると思われる。このように考えると定性効果が現れる名詞句に共通して見られるのは、部分格が付与される位置というよりも、むしろ通常の構造格 (structural Case) が与えられない位置に現れている点であると考えられる。

##### 4.1 分離の素性仮説

このようなthere構文の連結詞と述語名詞句の共通点に着目し、Honda (2020) では (11) のような構造を英語の名詞表現の構造として提案している。<sup>3</sup>

- (11) [<sub>a</sub> D<sub>1[Case:u]/[Person:u]}</sub> [<sub>D2P</sub> D<sub>2[Number:u]}</sub> NP<sub>[iPerson]/[iNumber]]]</sub>

一般的に名詞表現はDPであると分析され、限定詞Dが名詞句NPを補部を取る構造が考えられている。それに対し、(11)の構造では限定詞をD1とD2の2つに分離し、それぞれに異なる素性を仮定している。近年の生成文法では、DPは値未付与の格素性を持ち、DPが一致する要素に応じてこの格素性に主格や対格の値が与えられる。フランス語など冠詞に性・数が形態的に見られる言語においては限定詞と補部名詞句が一致を示すことから、限定詞は補部名詞句と一致可能な値未付与の人称素性、数素性（、及び英語では顕在的に現れないが）、性素性）を持ち、さらに値未付与な格素性を持つが、Hondaの分析ではこれらが(11)に示したようにD1とD2に分離して現れるとする分離の素性仮説を提案している。なお、この分析におけるD2は従来の分析に見られる冠詞などの限定詞Dに該当する。これにより、D1のみがTP指定部（主語位置）へ移動した場合、D1が虚辞thereとして具現され、D2Pが連結詞として現れるthere構文が派生されると説明できる。また、D2がD1に付加した場合は、(11)のa全体がTP指定部へ移動し、虚辞thereが現れない通常の文が派生されると提案している。

名詞表現が(11)のような構造を成していると分析する利点は、D2Pが必ずしもD1と併合(Merge)される必要がないことである。先に述べたように、述語名詞句は格を付与されない位置に現れるが、従来の分析では、(9a, b)のように限定詞が述語名詞句位置に出現可能であることを考えると、名詞表現であるDPについて格を付与されなくてもよいDPと通常の項位置に現れ格を付与されなければならないDPの2種類のDPを仮定しなければならない。一方、分離の素性仮説を採用すれば、述語名詞句など格を付与されない位置に現れる名詞表現は(11)におけるD2Pであり、この場合、D2PはD1と併合されない。したがって、値未付与な格素性を持たないので、そもそも格を付与される必要がないことになる。

Honda (2020) では、さらに、(12)(= (5)) や (13)(= (9)) の非文法性は、everyなどの強数量詞がD2がD1に付加することにより派生されるD1-D2複合体となっていると仮定することにより説明できると主張している。

- (12) a. \* There was every/each participant upset with the arrangements.  
 b. \* There were both/most ambassadors housed at that hotel. (= (5))
- (13) a. We consider John *a genius*.  
 b. ? They thought/believed him *the lawyer*.  
 c. \* They believed John and Mary *every friend*.  
 d. ? I thought the guests *many friends of hers*.  
 e. ?? I believe the Mayor *John*. (= (9))

例えば、there構文である(12)の例においては、every, each, both, mostはD1-D2複合体であることから、その中からD1のみを取り出してTP指定部へ移動することはできない。Hondaによれば、D1が単体でTP指定部へ移動した場合のみ、D1が虚辞thereとして具現されることから、そもそも

(12) のような文は派生不可能であると言える。一方で、(14) – (16) のような例は統語的には派生可能であると言える。

- (14) a. # There was Margaret at the party.  
       b. # There were them/those waiting outside. ( = (2) )
- (15) a. There's the University of Stoke.  
       b. There is my aunt from Worthing. ( = (3) )
- (16) There is the newspaper on the table. ( = (4) )

上記の例では強数量詞は現れておらず、連結詞位置に現れる名詞表現は全てD1がTP指定部へ抜け出したD2Pになっていると考えられる。この分析では、(14) の文法性は統語論の問題ではなく、何らかの情報構造に関する要因によって容認度が変わるものと考えられる。そのため、(14) は常に非文法的なわけではなく、文脈によって容認できることが説明できる。なお、上述のように、D2は冠詞などの要素に該当するため、(15) や (16) でtheやmyなどが出現可能となっている。

また、(13c) におけるevery friendは動詞の補部位置に現れているわけではないので格は付与されない。先に述べたように、強数量詞はD1-D2複合体であることから、値未付与な格素性を持つことになるが、(13c) のevery friendが現れる位置では格が付与されないため、この格素性に値が与えられず派生が破綻する。これが (13c) の非文法性の要因であると考えられる。一方で、(13c) 以外の (13) に示す例は全て完全に非文法的とはなっていない。これらの例に現れる述語名詞句は (14) – (16) の連結詞名詞句と同じようなタイプであると言える。したがって、これらの名詞表現は全てD2Pの構造になっていると言える。

#### 4.2 小節の構造とラベル付け

先の議論で、名詞表現はD1を含む (11) のような構造になっているか、D1を含まないD2Pの構造になっており、述語名詞句はD2Pになっていると提案したが、一見すると、この分析の反例になると思われる例についてここでは取り上げたい。

まず、(13a) のような文は (17) のような小節 (small clause = SC) 構造を含んでいると考えられる。

- (17) We consider [<sub>sc</sub> [John] [a genius]].

(17) のSCは、Johnとa geniusという2つの要素から構成されており、このSCは、“John is a genius.”という解釈を持っている。“X is Y”のようなコピュラ文の場合、現れる名詞句のタイプにもよるが、(18) のようにこの2つの要素は入れ替え可能であることが知られている。<sup>4</sup>

- (18) a. John is the culprit.

- b. The culprit is John. (Heycock 1995: 224)

ところが、この2つの要素がSC内に現れた場合はこのような入れ替えは不可能である。<sup>5</sup>

- (19) a. I consider [SC John the culprit]  
 b. \*I consider [SC the culprit John] (Heycock 1995: 227)

さらに複雑なことに、considerの補部がSCではなく不定詞節の場合はこのような入れ替えが可能であると言われている。

- (20) I consider the culprit to be John. (Heycock 1995: 227)

先に提案したように、述語名詞句はD2Pとなっているので、(18) – (20) におけるthe culpritはD2Pとなっていると言える。一方で、(18) – (20) におけるJohnはどのような構造になっているのだろうか。まず、考えられる可能性は(11)で提案したようにD1を主要部とする構造である。この場合、(19) は (21) のような構造から派生されると考えられる。<sup>6</sup>

- (21) [ $v^*$  [<sub>VP</sub> V<sub>[Person:u]/[Number:u]}</sub> [<sub>SC</sub> [ $\alpha$  D1<sub>[Case:u]/[Person:3]</sub> [<sub>D2P</sub> D2<sub>[Number:Sg]</sub> John<sub>[Person:3]/[Number:Sg]]] [<sub>D2P</sub> D2<sub>[Number:Sg]</sub> culprit<sub>[Person:3]/[Number:Sg]]]]]</sub></sub>

Chomsky (2008) によれば、文の主語になる名詞句がTP指定部に移動するのと同じ仕組みで、Vの補部名詞句もVP指定部に移動している。ただし、Vは軽動詞である $v^*$ に主要部移動するため、「動詞 – 目的語」という語順が生じる。ChomskyがこのようなVP指定部への移動の根拠としてあげているのが、(22a) のような例である。

- (22) a. The slave<sub>i</sub> expected [the picture of him<sub>i</sub>] to be somewhere else.  
 (adapted from Chomsky 2008: 149)  
 b. [<sub>TP</sub> the slave [ $v^*$  [<sub>VP</sub> [the picture of him]<sub>i</sub>] [expect [<sub>TP</sub>  $t_i$  to be  $t_i$  somewhere else]]]]]

(22a) において、the slaveとhimが同一指示の解釈を持つことが不可能であるが、これは束縛条件 (Binding Condition) Bにより、the slaveとthe picture of himが同じ節内に存在するためであると考えられる。この事実から、(22b) に示したように、Vの補部名詞句がVP指定部に移動していると考えられる。この考えに基けば、(21) はさらに (23) のように派生されると考えられる。

- (23) [ $v^*$ -V<sub>[Person:3]/[Number:Sg]</sub> [<sub>VP</sub> [ $\alpha$  D1<sub>[Case:Acc]/[Person:3]</sub> [<sub>D2P</sub> D2<sub>[Number:Sg]</sub> John<sub>[Person:3]/[Number:Sg]]] [<sub>VP</sub> [ $v^*$ -V<sub>[Person:3]/[Number:Sg]</sub>]]]]]</sub>

$$[\text{Number:Sg}] \left[ \text{SC} \left[ \text{D1}_{[\text{Case:u}/\text{Person:3}]} \left[ \text{D2P} \text{D2}_{[\text{Number:Sg}]} \text{John}_{[\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]} \right] \right] \left[ \text{D2P} \text{D2}_{[\text{Number:Sg}]} \text{culprit}_{[\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]} \right] \right]$$

(21) において、Vと一致しVP指定部へ繰り上げられる名詞句はJohnであると考えられるが、なぜthe culpritの方ではないのだろうか。Johnとthe culpritは(24)に示すようにお互い統御し合う関係になっており、Vから見て、いずれか一方がより近い位置にあるとは言えない。

(24)  $[\text{SC} [\text{John}]_{[\text{Case:u}/\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]} [\text{the culprit}]_{[\text{Number:Sg}]}]$

ここで、(21)においてVが持つ素性を考えた時、VがJohnと一致すれば人称素性と数素性の両方の値が与えられるのに対し、Vがthe culpritと一致した場合は数素性しか値が与えられない点に着目されたい。このような理由により、JohnがD1を主要部とする名詞表現の場合はJohnがVと一致し、VP指定部へ繰り上げられる。このため、(19b)のようにthe culpritがJohnに先行するような語順の文は派生されないと考えられる。

では、(18b)や(20)のような文はどのように派生されるのだろうか。本論文では、これらの文は、JohnがD1を含まず、述語名詞句と同様にD2Pの構造になっている場合に派生されると提案する。つまり、(20)のような文は(25)のような構造から派生されると考えられる。<sup>7</sup>

(25)  $[v^* [\text{VP} \text{V}_{[\text{Person:u}/\text{Number:u}]}] [\text{TP} \text{to be} [\text{SC} [\text{D2P} \text{D2}_{[\text{Number:Sg}]} \text{John}_{[\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]}] [\text{D2P} \text{D2}_{[\text{Number:Sg}]} \text{culprit}_{[\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]}]]]]]$

このような構造においては、VP指定部へ移動するのはJohnであってもthe culpritであってもよいことになる。また、これまでSCのラベルについては特に言及してこなかったが、Chomsky (2013)のラベル付けの考えに基けば、(25)において、Johnもthe culpritもどちらもSC内から移動しなければSCはラベル付けが不可能となる。したがって、SC内から移動するのはどちらの名詞句であってもよいが、必ず一方が移動しなければならない。(18)のような文についても同様に、(26)のような構造から派生されると考えられ、SC内から移動するのはJohnであってもthe culpritであってもよいため、(18a, b)がともに派生可能であると言える。

(26)  $... \text{is} [\text{SC} [\text{D2P} \text{D2}_{[\text{Number:Sg}]} \text{John}_{[\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]}] [\text{D2P} \text{D2}_{[\text{Number:Sg}]} \text{culprit}_{[\text{Person:3}/\text{Number:Sg}]}]]]$

ここで、(25)におけるVの人称素性にはどのようにして値が与えられるのか疑問に思われるかもしれないが、ここではD2補部のNPの人称素性と一致すると仮定しておく。もちろん、先に述べたようにJohnがD1を含む名詞表現である場合は必ずJohnが一致の対象となるため、その場合は(18a)のみが派生されると考えられる。



ここでの提案によれば、(18b) や (20) のような例では格素性の値付与が生じないことになるが、(27) – (28) のような日本語の例はこの主張を支持する証拠になると考えられる。

(27) a. 太郎が犯人だ。

b. 犯人は太郎だ。

(島山 2004: 165)

(28) \*犯人が太郎だ。

(島山 2004: 166)

(27a, b) は英語の例である (18a, b) に対応すると考えられるが、「犯人」がSC内から移動した場合は、(28) のように主格を表す格助詞「が」を付けることができない。英語では顕在的に格が標示されないため、(18b) のthe culpritの格については不明であるが、日本語の例である (27) と同様の構造をなしているとするれば、(18b) のthe culpritも格を持たないと考えられる。

したがって、there構文の連結詞と同様に定性効果が見られる述語名詞句についてもD2P構造になっていると言える。

## 5. 結論と今後の課題

本論文では、定性効果が現れる名詞句に共通することは、部分格が付与される位置にあるということではなく、格を付与されない名詞句であるという点を指摘した。またこのような名詞句は (11) にあげた構造のうち、D1を欠くD2P構造になっていると提案した。さらに、強数量詞はD1-D2複合体となっていると提案することで、D2Pが現れるべきであるthere構文の連結詞や述語名詞句の位置には強数量詞が出現できないと説明した。

ただし、定性効果が現れないと言われる (29) のような動詞句外存在構文 (outside verbal existential sentence) の場合、インフォーマント調査の結果では、(30) のようにthere構文に強数量詞が出現してもそれほど容認性は下がらないようである。

(29) a. Thereupon, there ambled into the room a frog.

b. Thereupon, there ambled into the room my neighbor's frog.

c. At the meeting, there were introduced into the record many ridiculous objections.

d. At the meeting, there were introduced into the record all of Scrungeworth's ridiculous objections.

e. Suddenly there flew through the window that shoe on the table.

f. There stood next to Mary's bed the ugliest lamp I have ever seen. (Milsark 1974: 246)

(30) a. ? Thereupon, there ambled into the room every frog.

b. ? Thereupon, there ambled into the room most frogs.

c. At the meeting, there was introduced into the record every ridiculous objection.

d. ? At the meeting, there were introduced into the record most ridiculous objections.

- e. ? Suddenly there flew through the window every shoe on the table.
- f. ? Suddenly there flew through the window every shoe.
- g. ? Suddenly there flew through the window most shoes on the table.
- h. ? Suddenly there flew through the window most shoes.
- i. ? There stood next to Mary's bed every lamp I have ever seen.
- j. ? There stood next to Mary's bed every lamp.
- k. ? There stood next to Mary's bed most lamps I have ever seen.
- l. ? There stood next to Mary's bed most lamps.

英語話者2名にインフォーマント調査をしたところ、2名とも(30c)は容認可能であると判断した。1名は文の意味する内容が論理的に不自然であるが、(30)に示した文そのものに文法的な問題はないうという判断であった。本論文の分析では虚辞thereが出現する文には強数量詞が現れないと予測するため、(30)の例が容認可能である理由は不明となる。なお、3節で見た(8)のように動詞句外存在構文でない通常の動詞句内存在構文であっても、allやeveryなどが出現可能な例があることは知られている。

- (31) a. There are all sorts of other false definites.
- b. There is every reason to study them. (= (8))

このような事実と(30)の容認性に何らかの関係がないか今後検討していきたい。

[注]

\* 本研究は、JSPS 科研費 20K13068 の助成を受けている。本論文の執筆にあたり貴重な意見をいただいた査読者及びインフォーマント調査に協力いただいた英語母語話者2名に感謝申し上げたい。

- 1 # は、文脈によって容認不可となる場合があることを示している。
- 2 Williams (1994: 42) では、(10b) のような例よりも、“I consider the mayor Batman.” のような例の方がこのような固有名詞が述語名詞句の位置に現れる例としては適しているのではないかという可能性も指摘されている。なお、注5と注6で後述するが、(10a)と(10b)が異なる解釈を持つことから、これらの文はそれぞれ別の基底構造から派生されていると考えられる。
- 3 Honda (2020) では、D1は接辞であるためラベル付け能力を持たない主要部であり、(11)全体のラベルはこのままでは決定できないため、ラベルを*a*と記載している。D2がD1に付加される場合は、全体のラベルはD1-D2となる。また、D1が(11)から移動すれば、D1は*a*内でラベル付けから見えなくなるため、(11)はD2Pとラベル付けされる。本論文では、この詳細には触れず、単に*a*と記載しておく。
- 4 以下のように入れ替え不可能なコピュラ文も存在するが、本論文では詳しく取り上げない。

- (i) a. John is a doctor.
- b. \*A doctor is John. (Heycock and Kroch 1999: 379)

このような例と(18)の違いは、(i)は述語文(predicative sentence)であるのに対して、(18)は等式文(equative sentence)であることに起因していると考えられる。後述するように、述語文では、現れる2つの名詞句のうちどちらか一方がD1を含む(11)のような構造になっているのに対し、等式文では必ずしもそうなっ

ていないという違いがあると本論文では仮定する。

- 5 査読者より、(19b) が容認されない一方で、(10a, b) がともに容認可能であるのはなぜかという疑問が呈されたが、これは (18) 及び (19) の SC が等式文となっているのに対して、(10) の SC が述語文となっていることに起因するものと考えられる。つまり、(18a) と (18b) が同じ基底構造から派生されているのに対し、注 2 で述べたように、(10a) と (10b) はそれぞれ別の基底構造から派生されていると考えられる。以下の注 7 も参照されたい。
- 6 以下、太字になっている素性は一致により値が付与された素性を示す。
- 7 これに対し、等式文ではない (10a) では John が、(10b) では the mayor がそれぞれ D1 を主要部とする (11) の構造となっており、逆に (10a) では the mayor が、(10b) では John がそれぞれ D2P となっていると考えられる。ただし、(10a, b) の例は表面上等式文のようでありながらなぜこのような違いが生じるのか、等式文と述語文で現れる名詞句の構造に違いが生じる理由は何か、という点については今後の研究課題としたい。なお、査読者からは名詞句の意味タイプ(非飽和名詞であるかどうか)が容認度に影響している可能性が指摘されたが、名詞句の意味タイプによって名詞句に D1 が含まれるかどうかが決まる可能性があるのかという点についても今後検討したい。

#### 参考文献

- Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusatives," *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- 畠山雄二 (2004) 『英語の構造と移動現象－生成文法理論とその科学性－』, 鳳書房, 東京.
- Heycock, Caroline (1995) "The Internal Structure of Small Clauses: New Evidence from Inversion," *NELS* 25, 223-238.
- Heycock, Caroline and Anthony Kroch (1999) "Pseudocleft Connectedness: Implications for the LF Interface Level," *Linguistic Inquiry* 30, 365-397.
- Honda, Takahiro (2020) "A Split Phi-Features Hypothesis and the Origin of the Expletive *There*," *English Linguistics* 37, 1-33.
- 久野暉・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』, くろしお出版, 東京.
- Lumsden, Michael (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*, Routledge, London.
- McNally, Louise (1997) *A Semantics for the English Existential Constructions*, Garland, New York.
- Milsark, Gary (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- Milsark, Gary (1977) "Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English," *Linguistic Analysis* 3, 1-29.
- Rothstein, Susan (2001) *Predicates and Their Subjects*, Kluwer, Dordrecht.
- Ward, Gregory and Betty Birner (1995) "Definites and the English Existential," *Language* 71, 722-742.
- Williams, Edwin (1994) *Thematic Structure in Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

キーワード：統語論、there 構文、定性効果、述語名詞、数量詞、 $\phi$  素性、小節